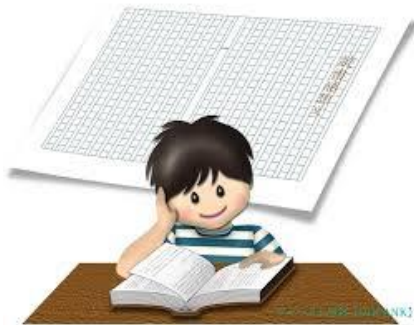


令和六年度

「高志の国文学」情景作品コンクール

入選作品集



## 令和6年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品一覧表

### ○文芸部門

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	中学生 ひよどり	短歌	南砺市立平中学校	3	藤田 大智	五箇山富山文庫
	高校生 海、巡りて	散文	富山中部高等学校	1	中嶋 悠	富山湾読本

#### 【散文・詩部門】

金賞	中学生 何者として生きるか	散文	高岡市立高岡西部中学校	3	山本 小香	おおかみこどもの雨と雪
	高校生 歩む	散文	高岡高等学校	2	河邊 泰雅	長い道
銀賞	中学生 ささやかな幸せ	散文	高岡市立高岡西部中学校	1	早川 すず花	川っぺりムコリッタ
	高校生 つなぐ	散文	高岡高等学校	2	永原 優里	鶴のいた庭
佳作	中学生 蜃気楼	詩	砺波市立庄西中学校	2	塚田 紗史	押絵と旅する男
	中学生 私の立山	詩	砺波市立庄西中学校	3	平木 華与	立山
	高校生 水平線の先	散文	富山中部高等学校	1	下村 葵	富山県の歴史散歩
	高校生 ぼけっとなの中をのぞいたら	詩	高岡南高等学校	2	中西 結菜	ドラえもん

#### 【短歌・俳句部門】

金賞	中学生 しで竹踊り	短歌	南砺市立平中学校	3	細川 芽吹	五箇山富山文庫
	高校生 弥栄	短歌	伏木高等学校	1	鶴谷 和奈	ふるさと
銀賞	中学生 故郷	俳句	富山市立八尾中学校	3	平山 奈津実	AMAZING TOYAMA
	高校生 柿すだれ	俳句	高岡工芸高等学校	3	五天 結子	干し柿
佳作	中学生 天神様	短歌	南砺市立南砺つばき学舎	8	中山 一翔	井波彫刻
	中学生 故郷	俳句	富山市立八尾中学校	3	藤澤 柊栞	風の盆おわら案内記
	高校生 散居村	短歌	南砺福野高等学校	3	柴田 莉緒	散居村
	高校生 慰霊の灯り	俳句	魚津高等学校	1	湊谷 優花	富山湾の螢鳥賊

※ 文芸部門は、知事賞以外は「散文・詩」「短歌・俳句」の区分ごとに賞を設定

○美術部門

賞	題名	学校	学年	名前	題材	
知事賞	中学生	富山大空襲	富山市立水橋中学校	2	岡本 桃花	八月二日、天まで焼けた
	高校生	時を運ぶ海	富山中部高等学校	2	岩村 可菜子	富山湾読本
金賞	中学生	火牛の計(俱利伽羅峠の戦い)	富山市立速星中学校	1	高林 航平	平家物語
	高校生	光る春の日	富山中部高等学校	2	日比 綺音	富山わがまちここ1番
銀賞	中学生	室堂平	富山市立新庄中学校	1	竹迫 愛佳	おおかみこどもの雨と雪
	高校生	崔嵬たる山	富山中部高等学校	2	李 美萱	劔岳 点の記
佳作	高校生	宮崎海岸のたからもの	富山中部高等学校	2	柴田 智史	まっとうな人生(絲山秋子)
		獅子と天狗の舞	富山東高等学校	1	高林 美咲	富山民俗の位相

○写真部門

賞	題名	学校	学年	名前	題材	
知事賞	中学生	富山の宝物	小矢部市立大谷中学校	1	津田 歩乃嘉	大学的富山ガイド こだわりの歩き方
	高校生	祈り	富山東高等学校	2	清澤 俊輔	白山・立山の宗教文化
金賞	中学生	見守る優しい瞳	高岡市立戸出中学校	2	石崎 大輝	新装版まんが道 藤子不二雄A
	高校生	帰りたくなる場所	富山南高等学校	2	善光 悠仁	人生の約束
銀賞	中学生	大好きな物	小矢部市立大谷中学校	1	大西 信乃	ドラえもん
	高校生	生命の源日本海	高岡南高等学校	2	金谷 侑咲	日本海
佳作	中学生	どこでもドアでどこまでも	小矢部市立大谷中学校	1	西守 瞬汰	ドラえもん
		聖人橋	小矢部市立大谷中学校	2	高橋 一生	川っぺりムコリッタ
	高校生	とける	富山東高等学校	1	須波 夕葵	青桐
		帆船と架け橋の月夜舞台	高岡南高等学校	2	渡辺 悠斗	ナラタージュ

# 知事賞（中学生の部）

題材『五箇山富山文庫』

ひよどり

南砺市立平中学校 三年 藤田 大智

合掌の

かやぶき屋根に

住みついて

五月生まれの

ひよどりが鳴く

# 知事賞（高校生の部）

題材『富山湾読本』

## 海、巡りて

富山中部高等学校 一年 中嶋 悠

朝方の冷たい空気が、富山湾の潮の香りと戯れながら肌を刺す。見上げれば、雲一つない闇を、あたたかな光が溶かし始めていた。

「やー、気持ちいいくらい釣日和だなー」

屈伸をしながら父はそう言うが、そんな天気とは打って変わり、僕の心中には暗雲が立ち込めていた。原因は、先日母に受けさせられたカウセリングにある。いつからか、張り詰めていた糸がぷつりと切れたかのように、学校へ行けなくなった。いじめをするような奴らに負けてたまるか。という威勢は、いとも簡単に折られ、気づけば、情けなさど無力感に苛まれ、死を願う自分のみが残っていたのだ。どうして、と問うたびに、理由なんかねえよ、と吐き捨てた奴らから、僕は世の中の不条理さを教わった。それからずっと昨日のカウセリングでも、他人からかけられる言葉が、どれも薄っぺらく聞こえるようになってしまったのだ。

きっと父もそんな陳腐な言葉を並べてくるに違いない。いっそ目の前の海にでも飛び込んでやろうか。そんなことを考えながら父の背を眺めていると、上方から、ミャーオミャーオと騒ぐ声が降ってきた。

「見ろよ、カモメも気持ちよさそうだよ」

「急に連れてきてなんだよ。しかもあれ、カモメじゃなくてウミネコだし」

のほほんと言った父に思わず噛みつくくと、

「やっぱりお前は賢いな。俺が中坊のころなんか、海辺に住んでる猫だと思っていたぞ」

笑いながら、のらりくらりと躲された。

くだらない。早く本題に入ればいいのに。不服に思いながらも父の海釣りに付き合っていると、港の奥から、船に乗ろうとする人影が見え

た。それは、美しい女性だった。色とりどりの花と、小さな紙の小包を携えた姿に目を引かれる。見たところ、漁や釣りをしに行くわけではなさそう。そんな僕の様子に気づいたのか、父がおもむるに口を開いた。

「海洋散骨って言うんだとよ。遺骨を粉にして海に撒くん。最期は、海に還りたいって思っている人も意外といらんだぜ」

ほう、と息が漏れる。そんな話は初耳だった。

「……物知りなお前なら、知っていると思うが、地球最初の生命は、海から生まれてきたって言われてるんだ」

無言で頷く。こっちは割とよく聞く話だ。

「そんで、さ」

「俺の骨はお前に撒いてほしい」

ハッと声が出た。何を唐突に言い出すんだ。突拍子もない話の流れに、驚く僕を見て、畳み掛けるように父は言う。

「海から生まれた古い命が、新たに生まれた若い命によって、また海に返される。命の循環って感じがして、ロマンあるだろ？」

命の循環という言葉は、父からよく聞かされていた。生き物を捕ること、それらを食べて生きていくこと、そうしていつか別の新たな命が生まれること。漁師である父の話には説得力があり、昔から、それらを聞くのが好きだった。

「そう考えると、自分の子に撒いてもらってなんかいいだろ？」

手で海の水をかき混ぜながら言った父の言葉には、重厚な力がこもっていた。壮大な話だが……。改めて、目の前のしぶきを立てる濃紺に目をやる。朝日が反射しているだけに、いつも見ている富山湾なのに、どうしようもなく生を感じて、ずっと見ていられる気がした。不思議な気持ちになりながらも、父の目を見てまっすぐ頷く。

「なら、お前も自分の子供に、骨、撒いてもらうといいさ」

だからさ、それまで生きろよ。と暗に示された父なりのエールに、強く肩を抱かれた気がした。

# 【散文・詩部門】

## 金賞（中学生の部）

題材『おおかみこどもの雨と雪』

### 何者として生きるか

高岡市立高岡西部中学校 三年 山本 小香

おおかみか。人間か。

どっちつかずの存在として生まれてきた子供たちに全身全霊で向き合い、一生懸命に育てる、若き母の物語「おおかみこどもの雨と雪」。この世に生まれたものとしてどう生きていくか。社会や自然界で生きていくことに対して、深く、そして鮮やかに描かれた作品でした。

小さい頃、おてんばで自分の本能のままに生きてきた雪。怖がりや決して冒険しようとはしなかった雨。成長していくにつれて、周りの子たちに溶け込み、女の子らしくしようと「人」としての生き方を学ぶ雪。自分の本能に従い考え、「おおかみ」として森と一緒に生きていくことを選んだ雨。同じ環境で育ったはずなのに、全く違う二人の生き方。花は母親として最後まで子供たちに寄り添い、笑顔を絶やしませんでした。

人には様々な生き方があります。現代社会において、人の生き方は自由であり何にも縛られない。私たちはそんな風に教えられてきました。しかし、「おおかみこどもの雨と雪」では、人ではなく狼としての生き方も描いています。自分とは何者なのか。物語の始まりはそこからでした。

人としてどう生きるかを考え、前の性格とは一変して女の子らしくするのを志した雪は、本当の自分を隠して辛そうに見えました。しかし、喧嘩をし、怪我までさせてしまった草平に自分がおおかみこどもであることを明かしました。そこに驚きもせず、判っていた、もう泣くなど口にする草平。雪は初めて母親以外の人に自分という存在を認められ、涙を流します。私は、人が成長したり新しい世界へと踏み出

すためには、家族ではなく、血のつながっていない誰かに認めてもらうことは必要なのではないかと考えました。生まれる前から自分を愛し、大切にしてくれた家族に認めてもらえないことはごく自然なことだと思います。自分のこれまでを知らず、無償の愛をくれる保証のない他人という存在だからこそ、認めてもらうことは自分にとってすごく意味のあるものになるのではないのでしょうか。反対に雨は、言葉や感情という概念が存在しない森に惹かれます。学校に慣れず、狼の姿で森の中で一日を過ごす雨。狩りの仕方を覚えたり、狐に森のことを教わったりして、野生の生き方を身につけました。最終的には花の元を離れて森へと旅立っていった雨ですが、人間が知らない未知の世界に我が子を送り出すのは花にとって大きな不安が襲ったことでしょう。ですが私は、周りに流されず自分で自分の存在を見出し生きていく雨はカッコいいと感じました。前例がなく頼れる人がいないところに行くのは勇気がいります。ですが、狼として成長し、森を守らなければという使命感で未知へと挑むその姿は、人でなくてもすごいと感じます。家族と離れ、前代未聞の道を行く。とても覚悟のいることですが、花から見て雨が輝いていたように、自分で決めた世界に飛び込むことは素晴らしいことなのではないかと、可能性に溢れたものなのではないかと。雨を見ていてそう感じるのです。

私は、少し変わったこの家族に、自分とは何者なのかを考え、自分の在るべき形を見出し、精一杯生きていくことの美しさを学びました。富山の激しく移り変わる四季と共に成長していく三人の姿は非常に濃く、鮮やかでした。作中では富山ゆかりの施設や大雪、台風などの自然現象まで細かく描かれました。初雪の中で駆け回っている三人の姿には小さい頃、初雪ではしゃいでいる昔の自分を思い出したくらいです。

人として自分の在るべき形を大切に、時には狼のように花や雪や雨を愛し、気高く生きてみよう。

この物語を通した今、私はそんな風に思うのです。

# 金賞（高校生の部）

題材『長い道』

歩む

高岡高等学校 二年 河邊 泰雅

僕らは今、「長い道」の上にいる。

著者柏原兵三氏は東京都出身であるが、小学校五年生の時に父の故郷である富山県入善町に疎開してきた。その疎開先での経験は登場人物の命として吹き込まれ、「長い道」という潔少年の葛藤を青々と描いた一作が誕生した。

「長い道」。このタイトルは物語の世界に見事に体现している。

根本はやはり潔が毎朝歩いた通学路だろう。その道を長くしたのは三キロという数字ではなく、自分の所属した級の級長、竹下進を中心に据えた集団からの耐え難い仕打ちだ。雄大な日本アルプスや四季折々の田園風景が姿を眩ますほどに、おどろく悲惨なものだった。

私はここにも一つの長い道を見出した。潔の歩んだ日々である。除け者にされ、自分を揶揄する歌を大声で歌われ、進たちを満足させるための語り部にされ、時には食べ物などを徴発され；散々でありながらも逃げずに向き合い続けた長い日々。その気になれば、この苦に満ちた日常を投げ出して、楽になれただろう。

では、なぜ、潔は耐え続けたのか。

それは、二人でいるときは親友そのものの進と表向きでもちゃんと友人になりたいという望みや今逃げれば敵の思うつぼだと張った意地など、入り乱れた強い思いの火が潔の中から消え失せなかったからに違いない。

潔は進らに紆余曲折した「長い道」を突き付けられても、その道を踏み外しはしなかった。つまり、自分が迎える日々は自分のものだからと向き合い続け、自力で「変えよう」と歩みを止めなかったのである。結果的に潔は満足のいく日常を自力で手にすることはできなかつ

たが、潔は考えることをやめなかった上、最後には進に台頭してリーダー格に立った松に抵抗するほど精神面で強くなったのだった。

少々意外かもしれないが、潔を追い詰めた進の歩んだ道も険しく、辛い道であったのではなからうか。進は成績優秀で級の名とめ役、そして潔を苦しめた集団のリーダーとしての変え難い地位を得ていた。しかし進の行動にはいささか不可解な点がある。例えば、潔と二人でいるときは侮辱することも嫌がらせをすることもなくただの親友のようふるまったり、集団の真ん中にも潔を揶揄する歌を口にしながらたりといったものだ。これは進にプライドと責任感という大きな足枷がついていたことの示唆ではないだろうか。東京から自分と対等、もしくはそれ以上の実力をもった潔が疎開してきたことをきっかけに、自分のリーダーとしての立場が奪われることを危惧し、焦った。その一方で今まで現れなかった対等にいられる一番の友としての可能性も感じていた。進は選択できずにいたが、結果的に、潔以外の周りを意識した、行き過ぎたプライドが潔を遠ざけてしまい、集団にも一揆をおこされ、それまで権力の名の下に手に入れていたすべてを失ってしまったのである。進に気の置けない、対等な立場で接することができない仲間ができればどれほどよかっただろう！知らず知らず自分を隠し、繕い、積み上がってしまったプライドを皆の前で崩すのは恐ろしい。だからこそ初めて会った潔には自分を表現しようと試みながらもその夢は叶わず潰えたのだった。

僕らは今「長い道」の上にいる。それは決して平坦でまっすぐな道ではない。誰かにひん曲げられもするかもしれない。

自分の歩む道と潔く向き合い、行きつく先を信じることに、ともに歩む仲間を見つけありのままに語り合いながら進むこと、潔と進の足跡としてこれらのメッセージは残された。

さあどのように歩んでいこうか。

# 銀賞（中学生の部）

題材『川っぺりムコリッタ』

ささやかな幸せ

高岡市立高岡西部中学校 一年 早川 すす花

私はこの映画を見て「生」と「死」について深く考えさせられた。まずこの映画には生きることにについて考える場面がたくさんある。

主人公の山田は辛い過去を抱えていて、人と関わることを避けて田舎で暮らし始めた。そんな中、隣の住人島田が「お風呂を貸してほしい。」と上がり込んでくる。島田と関わるうちに山田の日常が少しずつ変わっていき、また温かい職場の人々や明るいアパートの住人達と出会い、生きることに希望を持てるようになっていく。生きていくためには人と人との繋がりが大切だと強く感じる作品である。また、この映画の食事シーンもとても印象的である。山田の食事はとても質素なものだが、なぜかとてもおいしそうに見える。お金がなくてずっとまともな食事をしていなかった山田が猛暑のアパートの中でぐったりしていた時に、島田が自分で作った採れたての野菜を窓から置いてくれた。置かれた野菜はぐったりとした山田とは対照的にとても輝いて見えた。野菜にそのままかぶりついた山田の表情は生き返ったようだった。初給料の後、久しぶりにご飯を炊いてお味噌汁と塩辛で食事をしたシーンで、炊き上がった炊飯器の蓋を開けた時の白いつやつやのご飯はにおいまでこちらに伝わってきそうだった。山田はそのご飯を本当においしそうに食べた。「生きることは食べること」シンプルだけれど大事なことだと改めて感じる事ができた。また孤独だった山田がアパートの住人にみんなですき焼きを食べるシーンは微笑ましかつた。「おいしいものはみんなで食べるのもっとおいしい」そんな風に感じるシーンだった。そして、「生」を感じるもう一つの要素は山や海、川、空など富山の美しい自然だ。山田はこの美しい自然に囲まれて少しずつエネルギーをもらったのだと思った。普段当たり前だと思っていた富山のおいしい食べ物や、美しい風景に生きるための大きな力があると感じ、誇らしく思えた。

そして、もう一つのテーマは「死」だ。孤独死した父の遺骨を引き取った山田と、大事な人を亡くしたアパートの住人達や命の電話の声など「死」について考える場面も多かった。

近年、高齢者や核家族の増加により、孤独死が多くなってきているそうだ。遺体の身元が判明しても遺族が見つからなかったり、遺族が見つかってもしも引き取りたくないというケースもあるそうだ。そんな場合地方自治体が火葬を行い、共同墓地に埋葬される。私は、孤独死や無縁仏が社会問題となっていることをこの映画で初めて知り、衝撃を受け、心が痛くなった。「死」は誰にでも必ず訪れるものだが、私は一人では死にたくないなど思った。家族だけではなく、周りの人との繋がりを大切にしていこうと、孤独死する人が減ってほしいと思う。

この映画のタイトルにある「ムコリッタ」とは、仏教における時間の単位の一つで、ささやかな幸せなどを意味するそうだ。

私は、この映画の登場人物のように辛い過去を抱えていないが、今の時代当たり前に使われているSNSのやり取りが苦手で、生きづらさを感じることがある。またこの先、人間関係などでもっと悩んだり、辛く悲しいことが起きてしまうのかもしれない。そんな時はこの映画のように、おいしい食べ物、美しい風景、周りの人たちの優しさなど、ささやかな幸せをたくさん見つけながら、生きていく一日一日を大切にしていきたい。幸せと思える日々を当たり前と思わず、その一瞬一瞬を全力で生きたい。そんなことをこの映画は、教えてくれた。

私は、この「川っぺりムコリッタ」という作品に出会えて本当に良かった。



# 銀賞（高校生の部）

題材『鶴のいた庭』

つなぐ

高岡高等学校 二年 永原 優里

『鶴のいた庭』は、堀田善衛の幼少期を振り返ったエッセイである。作者が小学生の時に住んでいた伏木にある廻船問屋「鶴屋」と、その周りで起こった出来事を描いている。鶴屋には様々な客人が来ては去って行く。庭には千と萬という鶴がいて、作者の曾祖父がよく眺めていた。屋敷には望楼があり、海を見張って船の到着を見届けるのである。

私は『鶴のいた庭』の舞台となった伏木の廻船問屋を訪れたことがある。現在の伏木北前船資料館である。中に入るなり、伏木港が栄えていたころの白黒写真が目に入ってきた。信じられないほど大きな船。江戸時代から始まった北前船貿易の寄港地となっていた伏木には、かつて多くの廻船問屋が並んでいたという。伏木に来た旅人たちはみな、そこに泊まっていった。その名残として、かつて廻船問屋であった資料館には、琉球製のふすまや、宴会に使われたであろう食器類があった。史料を見れば見るほど、当時の生活が想像できる。私がそこで最も楽しみにしていたのは、『鶴のいた庭』で作者も登りたがっていた、望楼に登ることだった。急で狭い階段を上へ上へと上っていくと、最後に小さな部屋に行きつく。畳が敷きつめられ、木でできた突き出し窓のある二、三畳の空間が歴史を感じさせる。そこが物見だった。あいにくその日は雨だったが、私は上からの景色を十分に堪能した。私がある住宅街、そしてわずかに見える水平線だけだったが、向こうの港に船が入り出す様子が思い浮かんだ。上から見る伏木は、いい景色だった。ずっとここにいたい、と思った。これを当時の人々が見ていたかと思うと、心感うらやましい。作者が見たいと思うのも分かった。私は施設を一通り見学した後、学芸員の方に伏木における北前船貿易の歴史について書いた本をいくつか見せてもらった。その本はどれ

も古く、昭和に出版されたものもあった。学芸員の方は大変詳しい解説を丁寧にしてくださった。聞いたところによると、その学芸員の方は資料館に赴任してから、近所のお年寄りに話を聞いて回ったり、専門家が書いた本を読んだりして北前船のことを一から学んだそう。私はその歴史を傳承しようとする努力に心を動かされた。同時に、北前船の歴史を知る人がいなくなり、次第に伏木の景観が昔とは違ったものへと変わっていくことに危機感を覚えた。

景色は時代の変遷とともに変わりやすいものだ。伏木でかつて北前船が入り出した場所は、コンクリートで固められ、廻船問屋はなくなり、住宅街が建ち……。昔の人が見ていた景色はどんどん失われていく。京都や奈良などの歴史ある都市では、景観の保全が求められるが、私はその理由がようやく今、分かった気がする。単なる観光のためではない。それは地域のアイデンティティを守るためだと思う。その地域のアイデンティティを守ることはその地域に住む人々のアイデンティティ守ることは心を守ることにもつながる。話を伝え、景色を伝え、心を伝えることが、これまで今昔あまたの人々の間で続けられてきたと考えると、魂が震えるような思いがする。それを私たちの世代で止めることができようか。

奈良や京都だけでなく、富山でもそれはずっと行われてきた。資料館で見た、学芸員の方の姿がまさにそうだ。時の流れとともに失われていく人の声を、景色を、消えないように、壊れないようにと懸命に守る努力が、どこにでも存在していることに気付いた。そのとたん、私はふるさとの文化がとても素晴らしく、誇らしく、愛おしく、大切なものと思えた。

## 佳作（中学生の部）

題材『押絵と旅する男』

### 蜃気楼

砺波市立庄西中学校 二年 塚田 紗史

乳色フィルムの表面に

じわ、じわ、じわ、

墨汁たらししてにじむよう

途方もなく

巨大な空に映された映画のよう

遠い海上に漂う大入道に思え

眼前一尺に迫る異形の霧と見え

曖昧な形の蜃気楼

不気味に思える蜃気楼

## 佳作（中学生の部）

題材『立山』

### 私の立山

砺波市立庄西中学校 三年 平木 華与

私の「立山」

富山県のシンボル

立山って「日本三霊山」の一つらしい  
神秘的な感じ

毎日見ているあの山が立山

小さい時から目の前に

連なり伸びる三、〇〇〇メートル級の山々  
大きく両手を広げて守ってくれる

ボディガードのような存在

「立山ブロック」

と言われたりするらしい

特別に晴れの日

いつも以上に大きくなったのもしく見える

「いってきます」

立山を背に学校へ

「いってらっしゃい」

見守られてる

今日も背中を押してくれる

私の立山

# 佳作（高校生の部）

題材『富山県の歴史散歩』

## 水平線の先

富山中部高等学校 一年 下村 葵

「知ってるかい？海にはたくさん命があるんだよ」  
遠くから誰かの声が届く。

「どうして？」

私は声の主がいるはずの闇に問う。

「命は、海から来て海に還る。失った命はすべて、海に行くということさ」

現実主義な私には理解ができなかった。ただ、人が死んだらそんな言葉に縋るしかないだろうなど、他人事のように聞くことしかできなかった。

「いつか君に苦しい別れが訪れた時は海に行くんだ。きっと、君の思いが伝わるはずさ。」

七月二十一日、夏休みが始まった日曜日。岩瀬浜。空は悲しそうに涙を流している。私と友人の唯織は市電から降りた。スマホで海までの経路を検索して傘をさす。

私たちはゆっくり歩きながら、何でもない会話をする。一つの会話が始めれば別の話題が生まれ方向転換。最初に何の話をしていたか忘れ、結論なんて生まれない、ただの雑談。それによって私は心を落ち着かせていた。

気づけば歩きだして二十分が経っており、視界にはテトラポットを攻撃する波と濡れた砂浜が広がっていた。雨が降っている中で五、六人ほどのグループが海水浴をして騒いでいた。そして私たちは散歩をする。富山駅の汗が流れる暑さとは裏腹にここは風が強く半袖では震えるほどに寒い。長袖の唯織は楽しそうに打ち寄せてくる波と遊んでいた。

そんなことをしているうちに雨はだんだん強くなってきて、海水浴

に来た人たちはいなくなっていた。それに気づいた瞬間に感じる海の壮大さ。果てしなく広がる砂浜の道に取り残されてしまったようで、なんだか切なくなる。

深く深呼吸をして、重いトートバッグから読み古した小説を取り出す。濡れないように傘で守り、表紙を見る。そして、胸の前で抱きしめる。唯織の方を見ると、彼女も同じことをしていた。

ここに来た目的はただ一つ。海のどこかにいるはずの作者に、ありったけの思いを伝える。これを教えてくれたのは彼自身だ。

「きっと届くよね……」

小さくつぶやく。

「絶対届くよ。茜ちゃんのこの人への愛は強すぎるもん」

私の声に気づいた唯織が微笑む。そして、二人で頷く。

『絶対、あなたを忘れない!! ありがとう!!』

返事はない。その代わり、強い潮風が髪の毛を巻き上げる。ぼやけた水平線の先の彼が笑ったような気がした。

ふと、涙が流れた。悲しいけれど、その感情ではない。伝えられなかったことを伝えられた嬉しさだ。でも、泣いてはいられない。

「ねえ唯織、今から富山駅に戻って本読まない？」

今は彼の言葉を噛み締めてみよう。そして、彼に縋りながらも生きるのだ。

「いいね、行こっか」

私たちはまた歩き出した。「彼は関東出身だから日本海じゃなくて太平洋にいるかもねー」なんていうおかしな話から始まって、また結論付けられないままいつの間にか別の話題に入っていく。でも、それがいいのだ。

私たちの思いは、ちゃんと彼に届いただろうか。

「君の言葉、ちゃんと受け取ったよ。ありがとう」

私が勝手に想像した彼の声で、求める返事を生成した。本人はどう言っているのだろうか。

雨は止まない。でも、その雨で私たちは生きていける。市電乗り場から、私たちは海に手を振った。

# 佳作（高校生の部）

題材『ドラえもん』

ぼけっこの中をのぞいたら

高岡南高等学校 二年 中西 結菜

ぼけっこの中を覗いたら

大きな大きな世界がある

どこにだって行けるよ、って

君が言うから

一歩、足を踏み出した

ぼけっこの中を覗いたら

大きな大きな宇宙がある

何にだってなれるよ、って

君が言うから

一歩、足を踏み出した

ぼけっこの中を除いたら

そこには何がある？

二次元でも四次元でもない世界で

遠いどこかに行くために

すてきな何かになるために

一歩、足を踏み出して

君の未来への歩み

【短歌・俳句部門】

金賞（中学生の部）

題材『五箇山富山文庫』

しで竹踊り

南砺市立平中学校 三年 細川 芽吹

しで竹で

踊るこきりこ

篠笛の

音に揺らめく

篝火の影かがりび

金賞（高校生の部）

題材『ふるさと』

弥栄

伏木高等学校 一年 鶴谷 和奈

復興に

出発しよう

けんか山

イヤサイヤサと

声高らかに

銀賞（中学生の部）

題材『AMAZING TOYAMA』

故郷

富山市立八尾中学校 三年 平山 奈津実

新生活

立山からの

大声援

銀賞（高校生の部）

題材『干し柿』

柿すだれ

高岡工芸高等学校 三年 五天 結子

この香り

間に結う斜陽まゆ

柿すだれ

## 佳作（中学生の部）

題材『井波彫刻』

### 天神様

南砺市立南砺つばき学舎 八年 中山 一翔

床の間で

木彫りの像に

手を合わせ

白き景色に

灯る寒梅

## 佳作（中学生の部）

題材『風の盆おわら案内記』

### 故郷

富山市立八尾中学校 三年 藤澤 柊葉

坂の町

照らすぼんぼり

光る笠

## 佳作（高校生の部）

題材『散居村』

### 散居村

南砺福野高等学校 三年 柴田 莉緒

十六時

太陽微笑む

散居村

金色の稲

ひるがえ  
翻る夏

## 佳作（高校生の部）

題材『富山湾の螢烏賊』

### 慰霊の灯り

魚津高等学校 一年 湊谷 優花

浜照らす

慰霊の灯り  
あか

螢烏賊



知事賞(中学生の部)

「富山大空襲」〈題材「八月二日、天まで焼けた」〉

富山市立水橋中学校2年 岡本 桃花



知事賞(高校生の部)

「時を運ぶ海」〈題材「富山湾読本」〉

富山中部高等学校2年 岩村 可菜子





金賞(中学生の部)

「火牛の計(倶利伽羅峠の戦い)」〈題材「平家物語」〉

富山市立速星中学校1年 高林 航平



金賞(高校生の部)

「光る春の日」〈題材「富山わがまちこ1番」〉

富山中部高等学校2年 日比 綺音





銀賞(中学生の部)

「室堂平」〈題材「おおかみこどもの雨と雪」〉

富山市立新庄中学校1年 竹迫 愛佳



銀賞(高校生の部)

「崔嵬たる山」〈題材「劔岳 点の記」〉

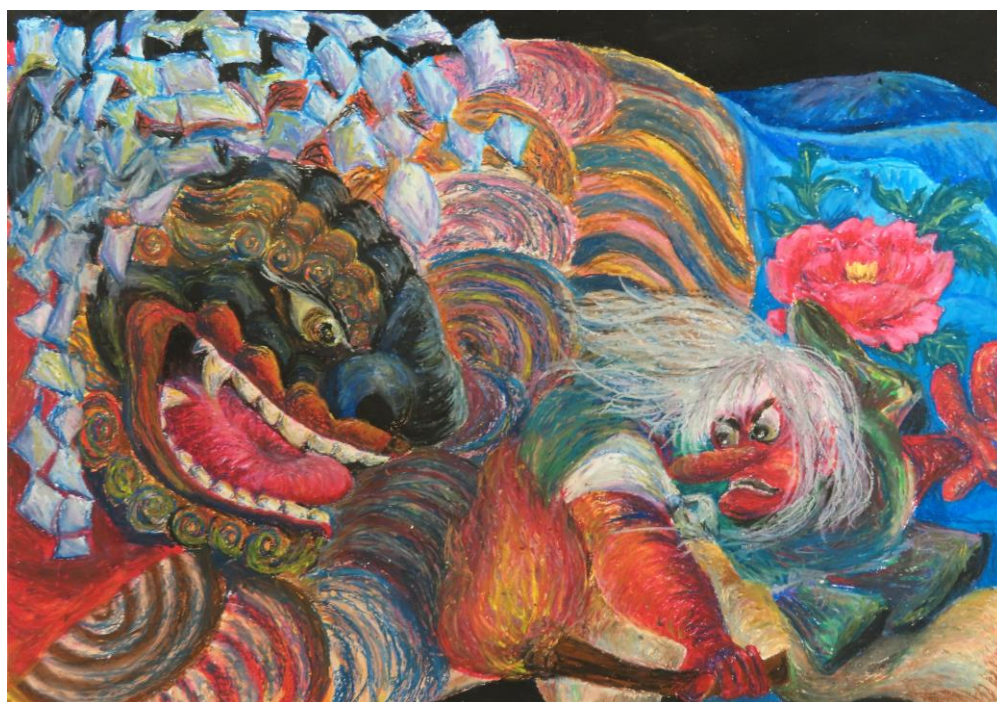
富山中部高等学校2年 李 美萱



佳作(高校生の部)

「宮崎海岸のたからもの」〈題材「まっとうな人生(糸山秋子)」〉

富山中部高等学校2年 柴田 智史



佳作(高校生の部)

「獅子と天狗の舞」〈題材「富山民俗の位相」〉

富山東高等学校1年 高林 美咲

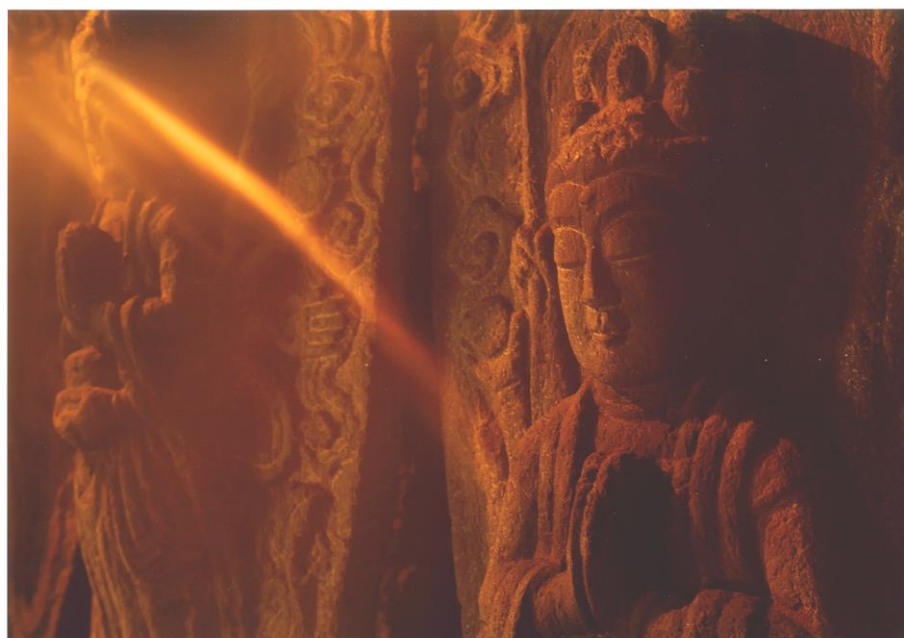




知事賞(中学生の部)

「富山の宝物」〈題材「大学的富山ガイド こだわりの歩き方」〉

小矢部市立大谷中学校1年 津田 歩乃嘉



知事賞(高校生の部)

「祈り」〈題材「白山・立山の宗教文化」〉

富山東高等学校2年 清澤 俊輔



金賞(中学生の部)

「見守る優しい瞳」〈題材「新装版まんが道 藤子不二雄A」〉

高岡市立戸出中学校2年 石崎 大輝



金賞(高校生の部)

「帰りたくなる場所」〈題材「人生の約束」〉

富山南高等学校2年 善光 悠仁





銀賞(中学生の部)

「大好きな物」〈題材「ドラえもん」〉

小矢部市立大谷中学校1年 大西 信乃



銀賞(高校生の部)

「生命の源日本海」〈題材「日本海」〉

高岡南高等学校2年 金谷 侑咲



佳作(中学生の部)

「どこでもドアでどこまでも」〈題材「ドラえもん」〉

小矢部市立大谷中学校1年

西守 瞬汰



佳作(中学生の部)

「聖人橋」〈題材「川っぺりムコリッタ」〉

小矢部市立大谷中学校2年

高橋 一生



佳作(高校生の部)

「とける」〈題材「青桐」〉

富山東高等学校1年 須波 夕葵



佳作(高校生の部)

「帆船と架け橋の月夜舞台」〈題材「ナラタージュ」〉

高岡南高等学校2年 渡辺 悠斗